さかしま

梁石日

江苏工业学院图书馆
藏书章

アートン

［著者紹介］
梁石日
1936年、大阪府生まれ。
著作に『タクシードライバー日誌』『夜の河を渡れ』『断層海流』『Ｚ』など多数。
『夜を賭けて』は直木賞候補に、著者の父をモデルにした『血と骨』は第十一回山本周五郎賞を受賞した。
他に、『異端は未来の扉を開く』『路地裏』がある。

さかしま

1999年11月30日　初版発行
1999年12月５日　２刷発行
著　者　梁石日（ヤン ソ ギル）

発行人　郭充良
発行所　株式会社アートン
東京都府中市宮西町2-9　〒183-0022
書籍編集部　042-335-6771　書籍販売部　042-335-6798
http://www.artone.co.jp

印刷・製本　図書印刷株式会社

©1999 Yan Sogiru & ARTONE Printed in Japan
ISBN4-901006-14-2　C0093

書籍の全部または、一部を無断で転載・複写することを禁じます。
乱丁本・落丁本は小社書籍販売部にお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。
著者との諒解により検印は廃止いたします。定価は表紙カバーに表示してあります。

武蔵野狭山丘陵の豊かな自然を残すナショナルトラスト運動「トトロのふるさと財団」に、
小社刊行物の売り上げ1冊につき5円を提供させていただきます。
http://www.jeton.ne.jp./users/totoro/

さかしま

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

目次

夢の回廊 5
さかしま 31
蜃気楼 113
運命の夜 139
消滅した男 163
忘れ物 181
トラブル 195

装画　黒田征太郎
装幀　長友啓典＋K2

夢の回廊

この二ケ月の間に同じ夢を何度も見ていた。そのことに私は最近ふと気付いたのである。ほとんどの夢は忘れてしまうものだが、なぜ同じ夢を何度も見るのか。それは少年の頃、大阪に住んでいたある路地の風景だった。疎開道路があり――この疎開道路は第二次大戦の末期にアメリカ空軍のB29に爆撃されるようになった日本の軍部が、焼夷弾の類焼を防ぐ名目で強制的に家屋をとり壊し、幅五十メートル、長さ四キロほどの道路にした――その疎開道路から脇に入った路地の突き当たりの焦げ茶色にくすんだ古い板壁を左に曲って行くとまた路地があり、その路地を右に曲ったところで夢は途切れるのだった。それは何の変哲もないありふれた路地の長屋の風景にすぎなかった。それなのになぜ同じ夢を何度も見るのか。私の潜在意識で、それらの風景に隠された何かを拒否しているからなのか、それとも夢の向う側の世界を見たいという欲求のあらわれなのか、いずれにしても私の胸の奥でからみついてくるような粘体質の

不可解なわだかまりが澱のように溜まっていた。

空はどこまでも澄みきっている。住んでいるマンションの五階の窓から眺めると、目の前にひときわ高い十数階建ての新築マンションが聳え、普通の二階建ての家屋の間に所狭しとばかりにさまざまな形のマンションがひしめいている。中天から少し西に傾きかけた七月の太陽に街全体がじりじりと灼かれ、環状七号線を走行している車輛群の吐き出す排気ガスが大気の中で発火していまにも爆発しそうな渋滞の中をリヤカーを引いた一台の自転車がゆっくりと走っていた。白髪の混じった五十前後の半袖姿の男が倒れそうになりながら体重を掛けて自転車のペダルを漕いでいる。リヤカーに積んでいる幾つもの大きなダンボール箱が荷崩れしそうだった。昔、どこかで見たような光景である。いや、数日前だったかもしれない。リヤカーの端に鎖でつながれた秋田犬のような犬が脚をふんばり、舌をだらりと垂らしてリヤカーを牽引していた。環状七号線から一方通行の細い脇道に六、七十メートル入ったマンションの五階の窓から眺めていた光景は、その細い脇道を横切るほんの二、三秒にすぎなかったが、なぜか私の脳裏に自転車を漕いでいる男とリヤカーを牽引している犬の姿がいつまでも残っていた。どこまでも続いている道を男は自転車のペダルを漕ぎ、鎖につながれた

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

犬はリヤカーを引っぱって行く。

夢の中の焦げ茶色の古い板壁を左に曲って、また路地を右に曲ったとき、リヤカーを牽引している男と犬に出会った。白内障のためか男の左眼は白く濁っていた。細い路地の中で私は男と犬が牽引しているリヤカーを避けて体を長屋にへばりつくように横になってすれちがったとき、すえた異様な臭いをかいだ。夢の中で臭いをかぐことがあるだろうか。しかし夢の中の記憶の底から、その異様な臭いは湧きあがってくるのだった。

日本が敗戦したとき私は小学二年生だった。本当は小学三年生になるのだが、戦時中、東京、岡山、九州、奈良などを転々と疎開して、その間通学できなかったので一学年遅れたのである。通学していた小学校の二学年は一クラス三十人くらいのAクラスとBクラスで、戦後間もない小学校の生徒数は似たような状態だった。そして小学二年から卒業する小学六年までクラス替えされることはなかった。だから小学二年生から卒業する六年生までの五年間、約三十人の生徒は同じ教室で学んだのである。その中でみんなより一歳年上の私はガキ大将のような存在であった。子供の頃の一歳の年齢差は精神的にも肉体的にもかなりの差がある。勉強はしなかったが成績も良かっ

た。スポーツも短距離、野球、水泳が得意だった。中でも一時、野球に熱中し、藤村と大下のホームラン争いに胸をときめかせた。チューインガムを買い、包装紙の点数を集めてミットを当てたことがある。豚革の粗末な子供用のミットだったが、まるで野球選手にでもなったような気分になり、クラスの男子生徒をつのって野球チームを編成し、私はもっとも重要なポジションを一人占めして主将とピッチャーと四番バッターを務め、他校の生徒たちと試合していた。その野球チームの中に高橋勤という生徒がいた。小柄だがすばしこくてショートを守備していた。私のことを「兄貴、兄貴」と呼び、いつも私の後ろにくっついていた。肩で風を切り、少し巻き舌を使ってしゃべり、チンピラやくざを気取っているところがあって女生徒からは嫌われていたが、遊びも喧嘩も高橋勤は果敢だった。

ある夏の日である。確か小学五年の夏休みだったと思う。私は野球チームを連れて三日に一度の割り合いで他校生徒の野球チームと転戦していた。野球チームはいつも学校の校庭に集合して、それから相手の学校の校庭や真田山公園の広場で試合するのだが、その日は珍しく高橋勤の姿が見えなかった。そこで私は補欠選手を使うことにした。試合の場所は大きなガスタンクが三基並んでいる緑橋の広場だった。試合は一

回から苦戦を強いられ、終ってみると十対二という大敗だった。あきらかに高橋勤の欠員による大敗であった。あいつがいれば、こうも無様に大敗はしなかったのに、と屈辱を味わった。エラーで四点の失点を出した補欠選手の大久保敏正はしょげかえってうつむいたままチームの最後尾を歩いていた。図体は大きいのだが反射神経の鈍い大久保敏正を相手チームは集中攻撃してきたのだ。

学校を出るとあたりは焼け跡だった。その赤褐色の焼け跡は運河の向う岸に続き、さらに緑橋の大きな三基のガスタンクにまで広がっている。大阪大空襲のときガスタンクは奇跡的に空襲からまぬがれたのである。

夏の強い陽射しは影をも地面に灼きつけんばかりであった。汗は炭火であぶられている魚が身をそらせてじりじりと脂肪をにじませてくるように皮膚の内側から体液とともに蒸発して塩を吹いていた。焼け跡の赤褐色の土はいまだに焼夷弾の炎につつまれているような熱をおびていた。焼け跡のあちこちにある畑からは肥溜(こえだ)めの臭いが漂い、なすびやトマトやきゅうりが実っている。私は暑さと屈辱と疲れでチームの選手を総括する元気もなく、グローブをぶらさげ、バットを引きずってのろのろと歩いていた。運動靴の底が割れ、穴の開いた靴先から親指がのぞいていて、ほとんど素足で

歩いているようなものだった。
今里ロータリーから玉造方面に歩き、東成警察署にさしかかったとき、木造二階建ての警察署を囲んでいる板塀にぶら下がるようにしてたかっている多くの野次馬が何かを見物していた。素早く板塀に飛びついて内部の様子を瞥見(べつけん)した野球チームの選手の一人が私のところに走ってきて、
「凄いで、びっくりした」
と顔面蒼白になっていた。
「何が凄いねん」
と私は訊(き)いた。
「とにかく見てみ、びっくりするから」
と言って彼はとたんに嘔吐した。その様子に私も板塀に飛びついて懸垂でもするように体を持ち上げて顔をのぞかせて内部を見ると、そこは警察の裏庭だった。そのだだっ広い焼け跡の裏庭に脚を組んだ二つの大きな板の上に二つの肉の塊りが載せてあった。そして白衣を着てマスクをした四、五人の男と数名の警察官が立っていた。一瞬何なのかわからなかったが、それは二つの死体を解剖している光景だった。喉元(のど)か

らペニスにかけて真っ二つに切り開かれ、湾曲したあばら肉と内臓にハエが群がり、灼熱の太陽に灼かれて腐臭を放っていた。毎年夏になると父は一頭の豚を買ってきて家の裏の流し場で料理するのだが、その豚の肉とそっくりだった。肋骨にそって適度の脂肪と赤い肉が重なり、少し黒ずんだ内臓も豚の内臓と変わらなかった。よく見ると二つの死体は大人と子供だったが、さらによく見ると土色をした子供の顔は高橋勤であった。私は驚愕のあまり板塀からずり落ちてもんどり打った。

いったい何があったのか理解できなかった。なぜ高橋勤は警察の裏庭で解剖されているのか。うっ血した顔が血の塊りのように黒ずみ、真っ二つに裂かれた体の中の内臓は私が想像していた人間の神秘性のようなものを打ち砕いた。豚も人間も同じ臓物だと思った。けれども人間の死顔には他の動物とはちがう複雑な感情が——悲嘆、不安、恐怖、絶望、怨念、生への執念などが凝縮していた。そうか、私は夢の中で路地の板塀を左に曲ってまた右に曲って先へ行かずに、そこで夢から覚めたのは、この残酷な映像を見たくなかったのだ。夢と記憶と現実はわかちがたく密接な関係にあり、夢の中の見たくなかった映像を記憶の中で鮮明に再現できるのだった。

五十数年前の遠い昔の記憶である。五棟の平屋があり、五棟の二階建ての長屋があ

り、その裏に五棟の平屋があった。この朝鮮人長屋の路地の奥は市電通りから長屋の裏にかけて長方形に建っている弁天市場の壁にふさがれて糞詰まりになっている。市電通りに出る長屋の表には百坪ほどの空地と、その隅に共同水道があり、空地は近所の子供たちの遊び場になっていた。この遊び場で石投げ合戦をやって二人の子供が大けがをしたことがある。また共同水道は近所のおかみさんたちの井戸端会議の場所でもあった。夏には子供を水浴びさせたり、洗濯や食器類を洗うおかみさんたちのかしましい話し声と笑い声が聞えてくる。そして夏の終りを告げる地蔵祭りと盆踊りの広場にもなるのだった。

この空地の片隅で、深夜高橋勤は殺害されたのである。高橋勤の父は弁天市場の裏で小さな質屋を営んでいた。質屋といえば蔵のある大きな一軒家を連想しがちだが、高橋勤の父が営んでいた質屋は長屋の角の、私が住んでいた家屋と同じ程度の二階建て住居だった。高橋勤の父が殺害された時間は午前零時から午前一時までと思われる。この時間帯なら天井と壁が続いている長屋だから隣りの者に何らかの物音や声が聞えるはずなのに物音や声を聞いた者はいなかった。警察の検死によると背後から腕で首を絞めつけられ、首の骨を折って窒息死しているとのことだった。子供の高橋勤は父

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com